

幼稚園・保育園と小学校接続の活動参加における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした学生の体験的な学びの意義

植草 一世¹ 金子 功一² 松原 敬子¹ 園川 緑¹
小向 絵美³ 池田 里香³ 萩生田 明³

Significance of experiential learning for students based on the indicator of “the competences to be obtained by the end of early childhood” in participating in activities connecting kindergarten, nursery school and elementary school

UEKUSA Kazuyo KANEKO Koichi MATSUBARA Keiko SONOKAWA Midori
KOMUKAI Emi IKEDA Rika HAGYUDA Akira

本研究は、植草学園大学附属美浜幼稚園・M保育園・T小学校の接続の活動参加における自然体験活動（以下：森の遠足）の報告から、保育者養成における「幼児期の終わりまでに育ってほしい（10の）姿」でどのような学びがあるかについて調査し、考察することを目的とした。森の遠足の舞台は、植草学園の「共生の森」であり、短期大学の保育科学生1年生53名を調査対象とした。森の遠足後の学生の記述について、テキストマイニングの手法であるKH Coderを用いた共起ネットワーク分析を行った。その結果、学生は子どもたちとの森の遠足を通じて、10の姿の中でも、1）健康な心と体や2）自立心、3）協調性、7）自然とのかかわり・生命尊重だけでなく、6）思考力の芽生えや8）数量・図形・文字等への関心・尊重、9）言葉による伝え合い、10）豊かな感性と表現の8つの姿が身につくことが示唆された。

キーワード：幼保小接続、保育者養成教育、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿、森の遠足、学生

1 はじめに

1.1 学生の体験的な学び

植草学園短期大学では、2019年から保育者養成における多様性を見据えた授業や行事（活動）について検討した。本学の特色となる、子どもの多様性を理解し、それを踏まえた保育の展開を促す意味で、これまで教員はそれぞれインクルーシブ保育の学びを授業にとり入れる等、授業や行事（活動）を工夫してきた。

さらに、本学園内にあるビオトープ「植草共生の森」における活動では、生態系の重要性について、学生が自分自身の感性を磨き本質に触れる等、学びの質を視野に入れた授業を展開し、実践してきた。このような短大教員の専門性を活かした授業や活動

は、個々に存在するのではなく、学生が多様な人や子どもと付き合うことや、様々な活動を経験することで多様な見方ができることによって、インクルーシブ保育を促進する保育者を養成する助けとなっていることを明らかにした¹⁾²⁾。

また、ビオトープ「共生の森」を活用した活動（写真①②）では、様々な授業形態を可能にし、学生が幼児期の子どもに対する「10の姿」を把握できるようになり、保育者にとって重要な意義があった。自然教育に有効とされる共生の森を活用した体験活動を通して、幼児期の子どもに身につけさせたい「10の姿」を学生が学んでいく過程を検討した。その結果、ビオトープ作りの活動は「10の姿」の中でも、特に①「1. 健康な体と心」の姿の育成に焦

1 植草学園短期大学

2 植草学園大学

3 植草学園大学附属美浜幼稚園

点が当てられやすいが、さらに②「8. 数量・図形・文字などへの関心・感覚」や③「3. 協同性」「9. 言葉による伝え合い」の育成にも繋がる可能性があることが特徴として示唆された³⁾。さらにビオトープの自然体験を活用した保育実践では、保育科学生・保育者・幼児が参画することで、相互に学んでいく過程を確認すると共に、新たな実習教育方法を構築することを目的とした。この研究における調査や分析の結果、ビオトープ作りを重視した自然体験活動は学生自身の深い学修につながるとともに、子どものあそびの豊かな拡がりとそのあそびを見つめる保育者の眼差しが示された⁴⁾。保育者養成における「10の姿」について、学生の学びを深めていくには、自然教育に有効とされるビオトープを活用した体験活動(写真1、2)を重ね併せていくことが有効であると示唆された⁵⁾。



写真1 グリーンアドベンチャー



写真2 森の散歩

1.2 植草学園大学附属美浜幼稚園

植草学園大学附属美浜幼稚園(以下:美浜幼稚園と記す)は、植草幼児教育専門学校(1977~2008)の附属幼稚園として開園し、今年で創立46年目を迎えている。その後、植草学園大学(2009~)が開設され、大学の附属幼稚園として、障害があってもなくても共に豊かに過ごし、成長し合うインクルーシブ保育への挑戦を始め、障害児の受け入れを積極的に行うようになった。しかし、日本の少子化傾向の中で、美浜幼稚園においても園児の減少傾向である。また、園舎の老朽化が目立ち、対策の為に一時休園の準備を始め、2020年度の園児募集を一時休止している。そのため、本年度は、年長児1学年だけの保育で、異年齢児の子どもたちの交流が希薄になることが懸念された。

1.3 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続のあり方の交流活動の取り組み

2010年11月に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議)では、「児童期の教育をはじめとした義務教育は、生涯にわたって自ら学ぶ態度を培う上で重要なものであるが、それらは児童期から突然始まるのではなく、幼児期との連続性・一貫性のある教育の中で成立するものである。」とし、「幼児期の教育(特に幼児期の終わり)と児童期の教育の目標を『学びの基礎力の育成』という一つのつながりとして捉えることとする。」としている。

美浜幼稚園では、令和3年度・令和4年度の保育研究テーマを「幼稚園・保育園と小学校接続」に焦点をあてて保育実践を行った。幼稚園の敷地から道を隔てて正面にはC市立T小学校、斜向かいには私立M保育園がある。C市立T小学校の要請もあり、近隣の美浜幼稚園、私立M保育園とC市立T小学校との「幼保小の望ましい連携と交流を目指した」の交流活動をスタートさせることになった。美浜幼稚園では、異年齢の子どもたちの交流活動が叶い、さらに、幼児期の教育・保育と小学校の教育では、発達段階の違いだけでなく、教育課程等の違いについて学び、交流活動を行うことで、まずは相互を理解することの実践となる機会を得た。幼児期の教育・保育と小学校教育との間には、教育課程や指導方法

の相違点がある。その一方で、5歳児から小学校低学年までの発達の特性において、共通点もあること、円滑な接続を図るためには、共通点を相違点と調和させることを理解していきたいと考えている。この時期の発達の特性として共通することは、「対象との直接的・具体的な関わりを通して学ぶ」ということであろう。

1.4 美浜幼稚園、私立M保育園とC市立T小学校の交流活動

令和3年5月に幼保小それぞれの職員が集い、連携についての方向性や目的、内容等について共通理解を図った。交流は、感染状況を見ながら10月よりスタートさせた(P7資料参照)。また、基本的には年長児を中心とした活動だが、年中児と4年生との交流は2年後の就学(1年生と6年生のペア活動)を意識するなど関わり方の連続性にも配慮した。年度末の意見交換会を踏まえ、令和4年度の交流は計画的かつ流動的なものとなった。子どもたちの行きたいと思ったタイミングや興味・関心に合わせた行き来もし、より主体的に関わる中でお互いの関係性を深めていくことができた。さらに、年度当初には、授業参観の場を設けていただき、スタートカリキュラムの実践の様子と共に、子どもたちの育ちや学びがどのように接続しているのかを知ることができた。

2 目的

本研究は、植草学園大学附属美浜幼稚園・M保育園・T小学校の接続の実践研究の報告(森の遠足)から、保育者養成における保育科学生が、幼児の発達過程に基づいた「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を指標にし、どのような学びがあるかについて調査し、考察することを目的とした。

森の遠足の舞台は、植草学園大学・短期大学の小倉キャンパス内「共生の森」において展開された。

3 方法

- (1) 調査日：2022年10月31日
- (2) 調査対象：植草学園短期大学・保育者志望1年生53名
- (3) 場所：植草学園・小倉校舎A棟
- (4) 調査方法：『授業で「幼児期の終わりまでに

育ってほしい姿』の学び、その後、「幼保小の森の遠足」の中で「10の姿」として、どのような具体的な体験が印象に残ったか』を調査シートに記述させた。

(5) 調査項目

問1. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、“子どもの小学校就学時の具体的な姿(方向性)であり、保育士等が指導を行う際に考慮するもの”ということが理解できましたか？(回答なし：2名(3%))

①よく理解できた26名(50%)、②やや理解できた24名(45%)、③やや理解できない1名(2%)、④全く理解できない0名(0%)

問2. 今回の「森の遠足」での体験では、子どもの具体的な「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の学びとなりましたか？(回答なし：2名(3%))

①よく学べた31名(58%)、②やや学べた19名(37%)、③やや学べなかった1名(2%)、④全く学べなかった0名(0%)

問3. 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)共同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量や図形、標識や文字などの関心・感覚、(9)言葉による伝え合い、(10)豊かな感性と表現、について、子どもたちの「深い学び」「対話的学び」「主体的な学び」の具体的な姿が見られましたか。エピソードをあげて書きましょう。

(6) 倫理的配慮

調査にあたっては目的を説明し、調査結果は論文執筆においてデータとして使用するが個人の匿名性は守られること、得られた回答は本調査以外では使用しないことを口頭で説明した。また、調査への参加は自由意志であることを加えて説明した。なお、本調査で得られた回答を分析する際は、植草学園短期大学の倫理規程に基づいて行った。

(7) 分析方法

学生の記述内容を要約する方法として、「テキストマイニング」や「計量テキスト分析」の手法であるKH Coder⁶⁾を用いた。KH Coderは、語の選択にあたり恣意的となり得る「手作業」を廃止し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示するこ

と、及びコーディング規則を公開するという手順を踏むことによって、操作化における自由と客観性の両立を可能にしている。本研究では、KH Coder (Ver. 3. Alpha. 13) を用いることで、分析者の恣意的・主観的な解釈を極力排除し、客観性を確保しながら学生の自由記述における全体的な傾向を捉えることとした。2022年10月31日の森の遠足を通じて、学生が「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をどのように捉えているかを分析した。

4 結果と考察

(1) 学生の記述における単純集計結果

3つの各体験の記述内容それぞれをテキストファイル化し、KH Coderに読み込んだ後、前処理を実行及び文章の単純集計を行った。

その結果、総抽出語数が10,246語、異なり語数が1,175語であった。これらの頻出語における上位15語とその出現頻度を示す(表1)。また具体的な記述例についても示す(表2)。具体的な抽出語について、上位5語は、子ども(47語)、見る(46語)、自分(39語)、言う(33語)、スタンプ(32語)であ

り、子どもたちは友達と言い合いながら(伝え合いながら)、自分でスタンプカードと照らし合わせていることが示された。本研究において、上位に挙げられた頻出語の内容から、学生が森の遠足を通して子ども自身がどのような力を身につけたかについて深く考察できていたと考えられる。

表1 森の遠足の学生の記述に関する頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	子ども	47	10	押す	19
2	見る	46	10	行く	19
3	自分	39	11	友達	18
4	言う	33	12	言葉	17
5	スタンプ	32	12	聞く	17
6	思う	24	13	小学生	16
7	感じる	23	14	どんぐり	15
8	持つ	22	14	歩く	15
9	考える	20	15	学び	14
10	クイズ	19	15	楽しむ	14

表2 森の遠足における学生の記述例

10の姿	記述例
①健康な体と心	・私は小学2年生の男子を担当した。最初からとても元気いっぱい、共生の森の端から端まで走り回っていた。そんなお兄さんの姿を見て、小さい子どもたちも負けじと沢山走っていた。
②自立心	・学生が先導するのではなく、子どもたちが自ら地図を見て、看板を見て探していく流れで進んだ。学生の役割は見守ることという雰囲気の中で遠足をやり遂げられたので、どの子も主体的にプログラムを楽しんでいた。
③協同性	・子ども同士でけんかになりそうな時も、ダメなことはダメと、園児達に教えていた。
④道徳心・規範意識の芽生え	・園児達が列に並べていなかったときに、自然と自分の前に並ばせてあげていたのが印象的だった。
⑤社会生活との関わり	・一人の子がどんぐり貫って「お母さんにあげるんだ」と言って大事にしまっているのが印象的であった。
⑥思考力の芽生え	・色々な事に興味を持っていて疑問に思う事はたくさん聞いてくれた。どんぐりの上、何でとんがってるのー?など、予想のつかないものもたくさんあった。
⑦自然との関わり・生命尊重	・森の中の草木や昆虫など「なにこれー?」と興味を持ち会話を楽しんだ。カマキリを捕まえた子がいて、お友達同士で共有し、その後返してあげよう!と木に戻っていた。命を大切に扱う心が育っていると感じた。
⑧数量、図形、文字等への関心・感覚	・幼稚園の子ども達が本の文字を自分たちで読んでいたのが印象的だった。
⑨言葉による伝え合い	・今回アドベンチャーチームで参加しクイズを出したが、異年齢の様々なチームと関わる中で、各年齢毎の特徴を見ることができた。クイズに対し、年少の子どもと小1の子ども達は、積極的に発言し、他の年齢の子ども達は、考察後に発言する姿が多かった。
⑩豊かな感性と表現	・子ども達の問いかけや言葉を繰り返すことで、笑顔が見られたりさらに会話を発展させていたので、これが応答的なかわりだと感じた。

(2) エピソード自由筆記 (抜粋)

①健康な心と体

- ・自然の中で笑ったり走ったり、心と体を動かしていた。

②自立心

- ・学生が先導するのではなく、子どもたちが自ら地図を見て、看板を見て探していく流れで進んだ。
- ・学生の役割は見守ることという雰囲気の中で遠足をやり遂げられたので、主体的に楽しんでいた。

③協同性

- ・また足元について草の実を小学生の子が保育園の子達に「大丈夫？とってあげるよ！」と声をかけお世話する姿があった。

④道徳性・規範意識の芽生え

- ・ツタのブランコでは、順番を守って並んでいた。

⑤社会生活と関わり

- ・保育園の子、幼稚園の子が何かを見つけ、小学生が字を読んで解説をしていた。

⑥思考力の芽生え

⑦自然との関わり・生命尊重

- ・カマキリを捕まえた子がいて、お友達同士で共有し、その後返してあげよう！と木に戻っていた。命を大切に扱う心が育っていると感じた。

⑧量・図形、文字等への関心・感覚

- ・小学生が看板の字を読んであげていた。芋虫、カマキリを見つけた時に、手に持って「芋虫！カマキリ！2匹だね」と言って幼児に見せていた。

⑨言葉による伝え合い

- ・森の中の草木や昆虫など「なにこれー？」と興味を持ち会話を楽しんだ。
- ・「歩くと音がするー」と言っていて「どんな音？」と聞いたら「わさわさ」と言っていた。
- ・カッパが見えた等の声も上がり「秘密の話なんだけどね、みんなと同じお友達が『カッパがいるよ』って言ってたよ」と声をかけて、みんなの興味を引くこともできた。そのあからは、「カッパさん」と池に向かって呼びかけたりして楽しそうだった。
- ・「コナラをおならだよ」と言って友だちに伝えて喜んでた。

⑩豊かな感性と表現

- ・色々な事に興味を持っていて疑問に思う事はたく

さん聞いてくれた。どんぐりの上、何でとんがってるのー？等予想のつかないものもたくさんあった。たくさん葉や木に触れ楽しんでた。葉っぱに穴をあけてお面みたいにして遊んでいた。

- ・竹を見て「今もこの中にかぐや姫いるのー？」と言っていたのがとても印象的だった。

- ・ドングリに顔を書いて自分なりに楽しんだり、猫じゃらしをしっぽに見立ててあそんだり、自然の中での発想力は凄いと思った。

(3) 森の遠足における共起ネットワーク分析結果

テキストファイルの各行に1件ずつ入力された記述を読み込み、テキストから自動的に語を取り出し、それらの語の共起関係を探した。分析に際して、出現数による後の取捨選択については、最小出現数10、最小文書数1、描画する共起関係の絞り込みでは描画数を60に設定した。また、強い共起関係程濃い線にチェックした。その結果、森の遠足における共起ネットワークモデルが算出された。分析結果の読み方として、強い共起関係は太い線、出現数の多い語ほど大きい円で描画されている。また、語(Node)の色分けは「媒介中心性」によるものであり、色の濃いものが中心性の高さに関連することが示されている。

森の遠足の共起ネットワーク分析結果(図1)では、「①子一行くー待つー興味ー楽しむー一緒」、「②たくさんー葉ー枝ー木、ドングリー顔ー見つける、自然ー虫」、「③子どもー見るー姿ー心ー体ー思う」、「④聞くー歩く、言葉ー伝えるー感じる」、「⑤小学生ー幼稚園ー読むー文字」、「⑥友達ークイズー考える、スタンプー押すー自分」の6つの10の姿に関するネットワークで構成されていることが示唆された。

森の遠足のネットワーク分析結果と幼児期の終わりまでに育てほしい(10の)姿を比較すると、1)健康な心と体:③、2)自立心:⑥、3)協調性:①、4)道徳性・規範意識の芽生え:該当なし、5)社会生活との関わり:該当なし、6)思考力の芽生え:④・⑥、7)自然とのかかわり・生命尊重:②、8)数量・図形・文字等への関心・尊重:⑤、9)言葉による伝え合い:④、10)豊かな感性と表現:④と関連していた。特にその他として、幼保小の連携:⑤、に関連する特徴的な記述と

して示された。

これらの結果から学生は、森の遠足を通じて、4) 道徳性・規範意識の芽生え、5) 社会生活との関わりに関する姿は示されなかったが、1) 健康な心と体や2) 自立心、3) 協調性、7) 自然とのかかわり・生命尊重だけでなく、6) 思考力の芽生えや8) 数量・図形・文字等への関心・尊重、9) 言葉による伝え合い、10) 豊かな感性と表現の8つの姿(力)が身についたことが示されたと考えられる。

5 総合考察

本研究は、美浜幼稚園・M保育園・T小学校の接続における実践研究の報告から、保育者養成における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」でどのような学びがあるかについて調査し、考察すること

を目的とした。美浜幼稚園では、令和3年度・令和4年度の保育研究テーマを「幼稚園・保育園と小学校接続」に焦点をあてて保育実践を行い、「幼保小の望ましい連携と交流を目指した」の交流活動をスタートした。そして、令和3年5月に幼保小それぞれの職員が集い、連携についての方向性や目的、内容等について共通理解を図った。交流は、感染状況を見ながら10月よりスタートさせ、初年度は下記の重点を意識しながら行った。そして、令和4年10月31日に植草学園大学・短期大学の小倉キャンパス内「共生の森」を舞台にして、幼保小の連携を主とする活動を実践した。なお、学生の記述分析ではKH Coderによる共起ネットワーク分析を用いた。

分析の結果、学生は、森の遠足を通じて、4) 道徳性・規範意識の芽生え、5) 社会生活との関わりに関する姿は示されなかったが、1) 健康な心と体

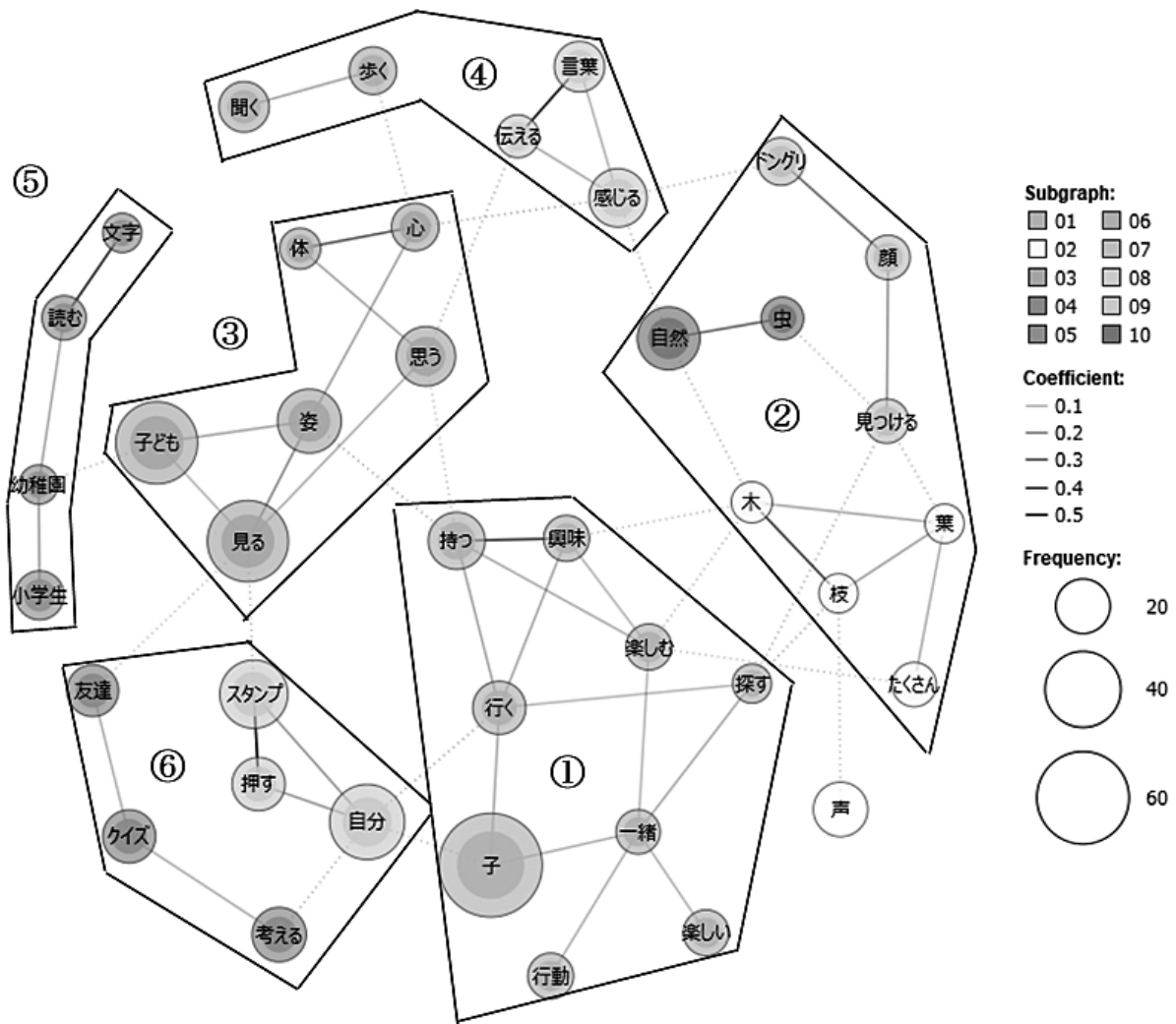


図1 森の遠足後の共起ネットワーク分析結果

や2) 自立心、3) 協調性、7) 自然とのかかわり・生命尊重だけでなく、6) 思考力の芽生えや8) 数量・図形・文字等への関心・尊重、9) 言葉による伝え合い、10) 豊かな感性と表現の8つの姿(力) が身についたことが示唆された。

また、その他の特徴として、幼保小連携に関する記述が示された。エピソード自由筆記(抜粋)から、小学生が幼児を気遣う姿や幼児が小学生や仲間と信頼を構築していく姿がうかがえた。

文部科学省(2018)⁷⁾では、幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムとスタートカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育(低学年)の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進している。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及することを課題としてあげている。本研究における共起ネットワーク分析結果で見いだされた、幼保小連携に関する記述は、今後、幼保小連携を強化する必要性を示唆していると考えられる。

謝辞

最後に、本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝いたします。また、本稿をまとめるにあたり、

千葉市立高洲第四小学校とまどか保育園のご協力にあらためて深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 植草一世・佐藤慎二・中澤潤 他8名(2019). 保育者養成短期大学の多様性を見据えた授業や行事(活動)の取り組み, 植草学園短期大学紀要 Vol. 20. pp. 57-67.
- 2) 植草一世・金子功一・栗原ひとみ 他5名(2022). 学生が体験的に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学ぶための多様性のある授業の意義Ⅰ, 植草学園短期大学紀要 Vol. 21. pp. 37-44.
- 3) 植草一世・金子功一・横田耕明 他5名(2021). 学生が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学ぶためのピオトープ活用の意義—附属園のピオトープ作り—植草学園短期大学紀要 Vol. 22. pp. 13-20.
- 4) 植草一世, 金子功一, 松原敬子, 栗原ひとみ, 金子智栄子(2022). ピオトープの自然体験を重視した新たな実習教育の構築—「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした保育科学生・保育者・幼児の相互の学びに焦点をあてて—植草学園短期大学紀要 Vol. 23. pp. 29-38.
- 5) 松原敬子, 植草一世, 金子功一(2022). 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を指標にした学生の体験的な学び—実習記録における振り返りから—植草学園短期大学紀要 Vol. 23. pp. 23-28.
- 6) 樋口耕一(2014). 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指してナカニシヤ出版.
- 7) 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程センター(2018). 発達や学びをつなぐスタートカリキュラム. pp. 1-99.

【資料 活動の記録】

(1) 2022年10月31日 森の遠足の計画と方向

=令和3年度=

《交流活動の重点》

- ・ねらいをもって交流活動を行い、教職員間の相互理解を大切にする。
- ・遊びや行事をきっかけに自然に「交流したい!」という思いや願いにつながるようにする。
- ・イベント的なものではなく、継続して行うことができるように交流計画や指導計画を立てる。
- ・幼保小の円滑な接続が、小学生になって困らないようにと早期小学校化にならないようにする。
- ・小学校では、活動の計画を立てる時間や事前事後の話し合いの時間を大切にする。

《教職員の意見交換の重点》

- ・アプローチカリキュラムおよびスタートカリキュラムの共通理解と実践・改善
- ・3つの資質・能力の理解と目指す子ども像(幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿)の共通理解

表3 資料① 令和3年度 交流活動の記録

実施日	内 容
10 / 22	小：【年長】 6年生による絵本の読み聞かせ①
11 / 1	小：【年長】 5年生となかよし遊び
11 / 2	小：【年長】 小学校探検および就学时健診体験
11 / 29	小：【年長】 1年生と秋遊び
12 / 1	小：【年長】 3年生と運動遊び
12 / 8	小：【年中】 4年生となかよし遊び
12 / 9	小：【年長】 2年生とクリスマスを楽しもう！（外国語活動）
2 / 3	小：【年長】 6年生による絵本の読み聞かせ②（リモート交流）
2 / 22	小：【年長】 1年生と就学に向けた交流（リモート交流）
3 / 10	小：【年中】 幼保森の遠足（ひまわり学級）
3 / 24	保小：【教職員】 幼保小意見交換会
※その他	お便りの交換、活動カードの掲示など

= 令和4年度 =

《ねらい》

園児：○小学校や小学生を身近に感じ、安心感をもつとともに小学校への憧れや期待感を持つ。

○小学生とのふれ合いを通して、人とかかわる楽しさを味わう。

児童：○幼児に伝わるような言葉遣いやかかわりを工夫することができる。（知・技）

○学習したことを生かし、活動のねらいに沿って、わかりやすく説明したり、かかわったりすることができる。（思・判・表）

○幼児と進んでかかわり、活動を楽しもうとしている。活動を通して自分の成長に気付き、自己の生活に生かそうとしている。（主体性）

表4 資料② 令和4年度 交流活動の記録

実施日	内 容
4 / 18 ~ 4 / 22	小：【教職員】 授業参観（アプローチカリキュラムの取り組みの様子）
4 / 26	小：【年長】 校庭遊び（業間休みの交流）
5 / 24	小：【 〃 】 校庭遊び／森の遠足に向けて交流会／運動会練習の見学
5 / 26	小：【 〃 】 校庭遊び／運動会練習の見学
6 / 2	小：【 〃 】 森の遠足（1、2年生）
6 / 14	小：【 〃 】 花いっぱい活動（1年生来園）
6 / 24	保：【 〃 】 幼稚園園庭遊び／遠足グループ顔合わせと旗作り
6 / 29	保：【 〃 】 幼保千葉公園遠足
9 / 27	小：【 〃 】 幼稚園運動会予行練習参観（1年生・6年生）
9 / 29	小：【 〃 】 運動会練習参観（ひまわり学級）
10 / 5	小：【 〃 】 花いっぱい活動（2年生来園）
10 / 18	小：【 〃 】 学校探検および就学时健診体験（2年生）
10 / 24	保小：【 〃 】 幼保小森の遠足に向けて交流会
10 / 31	保小：【 〃 】 幼保小森の遠足
11 / 22	小：【 〃 】 校庭遊び（散歩）
11 / 28	小：【 〃 】 1年生と秋遊び
11 / 30	小：【 〃 】 花いっぱい活動（1年生来園）
12 / 9	小：※クリスマス会のサンタ役依頼（教頭先生）

(2) エピソード記録

〈エピソード〉小学校に遊びに行こう (5歳児)

昨年度から小学校に行って交流会を実施した。2022年度は4月下旬から小学校の校庭に遊びに行っている。また幼保小での遠足を計画していたためそれに向けて交流会を行っている。初めは校庭で兄弟姉妹や顔なじみの卒園児を中心に小さなグループで遊び、他の小学生とは緊張からなかなか関係性を広げられずにいた。何度か行くうちに「鉄棒を見せてくれたお姉さんだ」「おもしろい先生いた」など顔を覚えた小学生や小学校の先生に会えることや、「また梯子みたいなやつ(雲梯)をやりたい」と園にはない遊具に挑戦する(写真③)など具体的な楽しみができ、小学校に遊びに行くことにより期待が高まっていた。

また、5月後半に小学校の運動会練習を見学し、小学生の兄姉がいる子が「ソーラン節知っている」と校庭の端で一緒に踊り始め、周りの子も見よう見まねで踊り、ダンスで知っている曲が流れると嬉しそうに手拍子をしながら見ていた。9月に入り、幼稚園でも運動会練習が始まった。今年度をもって休園することが決まっており年少中児がいないため、お客さんに見てもらうことができずにいたが、予行練習前に小学生に見に来てもらうことができた。すると子どもたちは、「前はゆき組が小学校に見に行ったけど、今度は小学校の人がゆき組を見に来てくれるってことだ」と両手を挙げて喜んでいて、自分たちの頑張りを認めてもらい、大きな拍手をもらったことに、さらに喜びを感じていた。

11月から各小学校で始まる就学時検診に向けて、10月には検診体験と校内探検を行った。自分の名前を元気に言うこと、視力検査で使う道具ややり方の説明などを受けて、緊張しながらも一生懸命に取り組んでいた。実際に11月に入り、自分の小学校に就学時検診に行く日には、クラスの友だちの前で自分の名前を言う練習をしたいと言って行った。友だちに認められ、大きな拍手をもらい自信をつけることができた。また、「頑張ってきてね」ではなく「楽しんできてね」と声をかけて送り出した。次の日にはクラスの友だちの前で、どうだったか尋ねると「楽しかった」と答えてくれる子が多かった。子どもにどんなことをしたのか聞くと、「名前を言った」「お腹の検査をするときは服の上からやった」「こないだ僕が行った時(別の小学校)は上の服を脱いで裸になった」などいろいろな情報を得ることができ、検診を控えている子の励みになった。

〈考察〉

小学校との運動会に向けてのかかわりはお互いに「見てもらおう」という経験が喜びに繋がり、当日に向けてより意欲が高まった。就学時検診は緊張と不安が大きく、余裕がない状態で過ごしたという子が例年多くいたが、小学校に行く機会を多く設けられたことや体験会を行ったことで、緊張しながらも楽しんで検診を受けることができたという印象を受けた。また、進学への期待を言葉にしている子が多くいることから、小学校との様々なかかわりがあり、少しずつ小学校が身近なところになっているのだと思う。



写真3 小学校への入学に向けて